

## 言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 趙 宏  
論文題目 日本語の会話文における「甚だしさを意味する」程度副詞  
—— 中古から近代に至る史的展開 ——  
論文審査委員 新井 皓士教授、秋谷 治教授、坂井 洋史教授

### I 本論文の構成

本論文は、標準的な日本語文法において程度副詞に分類されるもののうち、特に「甚だしさ」をあらわす語彙に着目、文献上この種の語彙が通常最も出現しやすい会話文に分析対象をしぼり、中古（平安時代）から近代（太平洋戦争末期まで）に至る文献資料を極力網羅的に調査して、その通時的変遷の実態を記述統計的に整理する一方、動詞や形容詞などとの共起関係を分析し、現代中国語との対比を念頭におきつつ、豊富な日本語の「甚だしさ」を意味する程度副詞（以下において、「程度副詞」とは、「甚だしさを意味する程度副詞の意」）を、包括的に把握しようとする試みである。

本文は 232 頁、文献目録の他に、現代中国語による「論文後記」6 頁からなるが、その構成は以下の通りである。

### 目次

#### 序章

第1節 研究の目的及び課題設定の理由

第2節 副詞及び程度副詞の位置付け

第3節 時代区分

第4節 研究方法

第5節 上代の時代概観及び文献資料

#### 第1章 中古の会話文における程度副詞

第1節 中古の時代概観及び使用する文献資料

第2節 物語（及び日記随筆・説話）の会話文における程度副詞の使用状況

第3節 中古における程度副詞の文法機能

#### 第2章 中世の会話文における程度副詞

第1節 中世の時代概観及び使用する文献資料

第2節 物語（及び説話・日記随筆・お伽草子・狂言・キリシタン口語資料）の会話文における程度副詞の使用状況

第3節 中世における程度副詞の文法機能

#### 第3章 近世の会話文における程度副詞

第1節	近世の時代概観及び使用する文献資料
第2節	小説（及び浄瑠璃・歌舞伎脚本）の会話文における程度副詞の使用状況
第3節	近世における程度副詞の文法機能
第4章	近代の会話文における程度副詞
第1節	近代の時代概観及び使用する文献資料
第2節	小説の会話文における程度副詞の文法機能
第3節	近代における程度副詞の文法機能
終章	程度副詞の通時的な考察と今後の課題

主要参考文献目録

論文後記

なお、分析資料文献一覧は各章第1節末に一括して、注釈は原則として小節毎に置かれ、章毎におかれた多数の集計表などの他に、終章には頻度上位語を通時的にみた盛衰軌跡グラフ、共起関係整理表がある。

## II 本論文の概要

本論文筆者は、かつて明治20年代の膨大な速記録（史談会、演説会、落語）における程度副詞をいわば馬力まかせにひたすら収集調査した実績をもつが、その折の反省が本論の序章第2節から第4節に有意義に反映している。まず程度副詞に関する先行研究を概観して本研究の拠って立つ基準を明らかにし、次に通時的な研究における文献資料の中心ジャンル（物語・小説類）と補足ジャンル（日記、狂言、歌舞伎など）の弁別、会話文特定の原理（蓄積された斯学の成果である校定本に則る原則）、時代区分の検討を経て、特に古い時代に関してはいわば悉皆調査にちかい方法をとること、共起関係の被修飾語分析に関しては工藤真由美の動詞分類論を援用すること、形容詞や形容動詞について「+-評価」を導入すること、などを明示している。また第5節では分析対象以前の「上代」について、予備調査の結果を簡単に報告しこの時代を直接取り扱わない所以を述べている。

第1章以下、第4章に至るまで、調査・分析方法と叙述スタイルは一貫している。

第1章は、中古・平安時代であり、時代区分上の下限を若干の検討ののち、院政開始期ではなく鎌倉幕府成立期とする。中心となる資料は物語12作品（大鏡、栄花を含む）であり、日記・随筆6作品、説話1作品が補足的に分析され、対照される。かな文学の系統では「いと」や「いみじく（う）」が圧倒的に高い頻度を示すことが数値的にあらためて確認されるが、『大鏡』や『土佐日記』に男性的語彙が垣間見られることも集計表が明らかにする一方、補足的にとりあげられた説話ジャンルの『今昔物語』（本朝部）では20巻以前の漢文訓読文体と22巻以後の和文調の違いが、程度副詞の使用頻度の差としてもあらわれることが述べられる。「程度副詞の文法機能」に関する第3節では、以後の章においても一貫して適用する方法として、まず頻度上位語に

ついて個別に分析・記述するが、その際、下接する被修飾語を品詞毎・作品毎に分類表示しているので、「いと」は形容詞を修飾することを主要な文法機能とするのに対し「いたく（う）」は動詞を修飾すること、頻度第4位の「きはめて」が修飾する下接語が「マイナス評価」語に著しく偏ること、など、定説を実証的に裏付けるデータやその分析に並んで、「転成」語であり動詞・形容（動）詞ともに修飾するとされる「いみじく（う）」は作品による偏りがあることなども示唆されている。

第2章が扱う中世は、鎌倉幕府成立から江戸幕府開設までを包含するが、事実上はこれを前期（鎌倉時代）と後期（室町時代以後）にわけ、前期にあつては擬古物語3作品と軍記物語3作品、説話集3作品、また補足的に日記・随筆を分析している。また後期については軍記物語・歴史物語4作品、お伽草子7作品を中心とし、補足的に狂言8作品、キリシタン口語資料2作品をとりあげている。中古にあつて圧倒的頻度を示した「いと」が徐々に衰退し、「ずいぶん」、「いたって」「しごく」などが初出語として登場することが明示される一方、頻度2位の「あまりに」が和漢混淆文に多用されるのに対し「あまり」は特に狂言やキリシタン口語資料で多用されること、しかし『曾我物語』の例から推すと両者には位相の区別がない可能性があることが指摘されている。

第3章の近世は江戸時代を意味するが、上方に比重のある前期と江戸中心の後期を意識した上で、前期の「小説」として仮名草紙・浮世草紙8作品をとりあげる。そのうち『好色五人女』には程度副詞の用例が見られないこと、また補足的にとりあげる近松浄瑠璃4作品において、「あまりに」の撥音便「あんまりに」が少なくとも明記された語として初出することなどを指摘する。また近世後期小説としては読本、洒落本、黄表紙、滑稽本、人情本の計23作品を調査するが、このうち『南総里見八犬伝』が規模もさることながら「いと」と「いたく」の使用頻度において突出していることが統計表から明らかになる。また「よほど」や「よっぽど」「すてきに」や「めっぽうに」などと並んで、「ひどく」や「たいそう」がこの時代に初めて観察されるが、補足的にとりあげられた歌舞伎4作品にも同様の例（「すてきに」を除く）があげられ、歌舞伎脚本の当時における現代性が浮き彫りされている。なお「いと」の頻度はいわば特異値なので頻度2位の「あ（ん）まり」がこの時代の会話における主要な程度副詞かと筆者は推定する。

第4章 近代の会話文の分析にあつては、これ以前の時代とはくらべものにならないほど膨大な言語資料が存在するが、分析資料の性質と方法論的一貫性のため、筆者はあえて小説資料のみを本論ではとりあげている。その場合発表年代がほぼ連続的になるよう配慮しつつ、明治時代36編、大正時代13編、昭和（前期）20編の計69作品を分析対象としたが、『舞姫』『羅生門』『春琴抄』『走れメロス』『山月記』の会話文には程度副詞の用例が見当たらないとされる。近代における程度副詞に関しては先行研究として小説を資料とする松井栄一の「近代口語文における程度副詞の消長 — 程度の甚だしさを表わす場合」があり、本論文もその恩恵を蒙るところなしとしないが、通時的視点に立つ本論文では文章語要素の強い地の文をあえて外して会話文のみを渉猟・抽出する点、また動詞などとの共起関係にまで考察を及ぼす点が、近代を対象とする第4章でも一貫し独自性を保っている。採集した程度副詞の（異なり語）数は、中古13種、中世16種、近世29種に対して、近代は34種と最も多くなっており、時代とともに変遷しつつ増

加する傾向は、「甚だしさ」を表わす程度副詞の本質とも関わると考えられる。頻度上位語の中には「ずいぶん」「あ(ん)まり」「たいへん」「よほ(つぽ)ど」「ひじょうに」など今でも生きているものが多いが、「おほき(い)に」のように、明治から昭和にかけて頻度が減少傾向にあるものもみられる。また「とても」については注において明治以来の諸説が紹介されている。

終章は以上の各章の分析結果を総括し、異なり語数(タイプ)にして45の程度副詞全体の変遷を総括し通観するものであるが、主要語彙の頻度順位・消長を視覚的にとらえやすくするグラフ及び「文法機能」・共起関係を集約する図表の工夫が、些か煩雑・晦渋な叙述に一抹の清風をもたらしている。

### III 本論文の成果と問題点

本論文の最大の特長は、「(程度の)甚だしさを意味する」程度副詞について、それが最も使用されやすい会話文の枠組みにおいて、中古以来の約1100年ほどの変化を一貫した方法で精査し統計的に記述し一定の視点から文法的考察を行い整理した点にあり、それによってこれまで個別に指摘されてきたような個々の語彙の特質—たとえば宣長による「いと」は形容詞に、「いたく」は動詞につくことの指摘—も、通時的・包括的視点のもとに、あるいは再確認され、あるいは限定されることが可能になった、といえよう。もとより程度副詞「総論」とするには本論文の対象である会話文以外の地の文にまで調査は及ぶことが望ましいが、「程度の甚だしさ」を表わす語の使用は会話(文)に極めて顕著に反映することは明らかであり、本論文の成果はその意味で以後の研究の基盤となるものである。

データの処理は統計的には初歩的次元でとどまっているが、比較のみやすく整備されており、特に終章のグラフや図表の工夫は評価することができる。統計的記述に関してあえて難をあげれば、各章の第3節における「文法機能」の検討において「一定の用例数」のある語群の比率を述べる際に、異なり語数と述べ語数の概念がやや曖昧となり、下接語の種類(タイプ)数のみで比率の大小を断定しているが、この場合は総頻度(トークン)も確認した上で判断すべきである。また近世における『南総里見八犬伝』の「いと」の頻度のように、統計的には外れ値とみなすべきものについても十分な検討がなされていない。関連して敷衍すれば、総じて資料そのものの限られる中古、中世に対して、近世以降の作品ないし分析対象の選択に関してはなお検討すべき余地もあり、均質的な校定本によるとする資料上の制約があるとはいえ、『水滸伝』を意識して『八犬伝』をとりあげるなら、たとえば『偽紫田舎源氏』などを少なくとも補足的にとりあげる必要があり、「明治20年代の口述筆記資料」のみを扱った修士論文の場合にはいわば初心者の幸運に恵まれた資料の一貫性があるのに対し、本論文の近世・近代に関しては対象資料選択の点で必ずしも瑕疵なしとしない。

個別的分析については、たとえば「いみじく」の使用例が紫式部には少ないという興味ある知見や、『平家物語』と『天草版平家物語』の比較、近代の「とても」における陳述副詞と程度副詞の関係など、本論文では先を急ぐあまり通り一遍に触れるにすぎないが、掘り下げ方次第ではこれらは重要な問題であり、それが萌芽のまま埋もれていることに、筆者は気付いていない。これは望蜀の一例にすぎないが、より緻密な考察と分析のみならず、絶えざる方法論的反省と展開

が今後の筆者の課題ともなろう。研究対象に肉薄する筆者の集中力はなみなみならぬものがあり、明清時代の中国語小説などとの比較研究をも念頭においた更なる研究の発展が期待されよう。

以上の審査により審査員一同は、本論文が非母語話者にして膨大な日本語文献に取り組み、一貫した分析方法により従来にない規模と視野において通時的・複合的に程度副詞を研究した成果であり、当該分野の研究に少なからず寄与するものと認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当である、と判断する。